

日文研と私

吳 京 煥

私は韓国の大学で日本文学を教授・研究する者であるが、今日はこの場を借りてそのような自分の職業について少し考えてみたいと思つて筆を取つた次第である。だからと言つて別に外国文学は翻訳同様不可能であるとか、そういう小難しいことを言うつもりはない。ただ日本文学の研究を仕事に行っている人間の脳裏をたまに掠めるものがあるので、それについて考えようというのである。

文学は感動を媒体にして影響を及ぼす言語体系である。影響は変化を意味する。そして変化は新生の機縁になることもあれば、不安を与え、混乱を引き起す場合もある。日本文学が私に影響を与え、変化をもたらしたことは確かである。ところが、そのための不安と混乱も同時に経験して来たし、なお現在に於いて経験しつつあることもまた事実である。それは私が日本文学に対して享楽主義者や唯美主義者にはなり切れない人間であることへの証拠であろう。要するに純粹な耽溺者にはならないのだ。それは私が文学に対して真正な理論家だからではない。恐らく私の中にある韓国人としてのアイデンティティーなるものの固執のためであると思つている。日本文学への感情移入と自分の国民的アイデンティティーは一見無関係のように見えよう。しかし、その両者は自分の中のどこかで触れ合っている。そして、その理由について私はまだ答えを出せずにいる。

その未解答の問題には、自我の形成や歴史・伝統など様々な難問が関わっている。ただ外国文学に向き合う人間として堅持すべき態度、あるいは心得とも言うべき一つの言葉を私はいまだに記憶している。それは大学院生の時の指導教授であった野口武彦先生から聞いた一言であった。その言葉を聞いた日のことはほとんど忘れてしまったが、言葉だけが明瞭に残っている。たぶん先に述べた問題が話題に上がったのであろう。先生は次のように言われた。「そりゃ吳君、外国文学の研究に携わるといのは、自分の魂を半分相手に売り渡すことだ。」

そのような先生の言葉が私に与えた衝撃を今でもよく覚えている。反撥の気持とそれから魂を半分だけ売り渡すという言葉の不可解な意味のためであつたらう。魂を全部売り渡すことは自己喪失を意味するに違いない。だからと言って少しも売ることなしに取りかかつては相手は一切自分の姿を見せないに決まっているという一種のジレンマに陥っている自分をどうすることもできなかつた。私は「先生、その言葉いささか穿ち過ぎではないでしょうか」と生意気な返事をしてその場をやり過ごした。

しかし、先生の言葉は長い間私から離れなかつた。現在の私はその言葉に対して次のような仮の結論に達している。それは日本文学という研究対象と自分との間で取るべき距離感である。それでも言葉の曖昧さは残存するのであるが、先生の言葉から引き出せる最大の理解であると思っている。そして、その理解から引き出したもう一つの問題が自分の中にあつた。それは日本文学の研究が眼差すべきは日本文学の特殊理論であるか、あるいは日本文学が表現した人類の共通理論であるかという二者択一の問題である。勿論そのふたつはどこかで通底しているかも知れない。しかし、そのような楽観的論理は端緒にはならない。

私は随分長らく自分に与えられた研究課題の解決に汲汲としたあまりそのような遠望をもつ

ことがなかった。自ら設定した課題の中で下した自己完結的な論理をよしとしたと言えよう。そのような私にもう少し広い展望を開かせてくれたのが日文研で過ごした一年間の研究生活である。率直に言って、その時まで私は国際的で学際的な研究方法には無関心に近い態度を取っていたが、日文研の活動とその業績に接することができると従って自分のその時までの態度を相対化する機会を得ることになったと思う。勿論それは日本文学の内面的理解の重要性を蔑ろにすることを全く意味しない。ただ私が思ったのは、国際的ないし学際的研究が日本文学の共通理論的研究への可能性を示すものとして説得力があるということである。

日文研が創立三〇年を迎えたというお話を聞いた。お祝いを述べるとともに今後のさらなる発展をお祈り申し上げる。私が日文研に滞在して研究生生活を送ったのはもう七年も前のことである。日文研は日本研究者にとって申し分のない機関であると思っている。図書館の充実と密度の濃い研究内容、そしてスタッフたちによる行き届いた研究支援は私の研究を大いに助けた。特に私に研究の方向については反省を促したことについては先述した通りである。お世話になったすべての方々はこの場で感謝の言葉を申し上げたい。

日文研滞在中に東日本大震災が起こった。そのことから受けた深い印象が消えずに残っていることを最後に申し添えたい。

(釜山大学校教授)